

銭形平次捕物控

赤い痣

野村胡堂

青空文庫

一

江戸名物の御用聞銭形の平次が、後にも前にもこんなひどい目に逢ったことがないという話。

「親分、変な強盗が流行るそうですね」

「それだよ、八、笹野の旦那にも呼び付けられて、さんざん油を絞られたんだが、十手捕縄を預かってから、俺はこんな馬鹿な目に逢ったことはねえ」

「笹野の旦那まで、親分が泥棒だとおっしゃるんですか、畜生ッ」

「これこれ何を言うんだ、——笹野の旦那はあの通り分った方だ。まさかこの平次が強盗をやるうと思つていらつしやるわけじゃないが、なにぶん世間の噂がうるさい。早く捕まえて正体を見せるようにと——こういうお話だ」

平次が悄気返るのも無理はありません。一と月ばかり前から、江戸中を荒し廻る恐ろしい強盗、時には女もさらえば、人も害める兇悪無慙なのが、——銭形平次らしい——という噂が立ったのです。

別段、「俺は錢形平次——」と名乗るわけではありませんが、物腰から背恰好、声の調子、ちよいとした癖まで、妙に平次に似ているのと、時々平次でなければならぬ事をするので、噂が次第に根強い疑いになり、遂には長い間に築き上げた平次の人気と名声も、これが動機で一ぺんに叩き潰されてしまいそうにさえ見えるのでした。

「親分、引っ込んでいちゃ、世間の疑いが晴れっこはありません。縄張なんかにこだわらずに、荒した跡を一日見て廻ったらどんなものでしょう」

「なるほど、それも思い付きだろう。変な顔をされるのを覚悟で、一軒一軒風潰しに当ってみるとしよつか」

平次は早速その作戦に取りかかりました。一番最初に行ったのは神谷町の酒屋伊勢徳、この辺は柴井町の友次郎の縄張ですが、平次一期の浮沈に拘わることで、日頃仲の悪い友次郎の思惑などを考えちやいられません。

「御免よ」

「あッ、錢形の親分さん」

番頭は真つ蒼になりました。不意に幽霊でも見たような心持だったのでしよう。

「私を知っていなさるのかえ」

「へえ——」

「強盗に入られた時の様子を詳しく聞きたいが」

平次はさり気ない顔で帳場格子の前に腰をおろしました。

「どうぞ、奥へお通り下さい、店じや——」

「商売に障るといふのか、八、それじゃしばらくお邪魔をさして貰おうか」

番頭に案内されて奥に通ると、主人の徳七は、それでも機嫌よく迎えてくれました。

「銭形の親分さん、御苦労様で」

「御主人は私を知っていなさるだろうね」

「へエ、よく存じております」

「強盗の入った日のことを復習おさらいして貰いたいが」

平次とガラツ八は、煙草盆を隔てて、近々と主人の徳七と相對しました。五十二三の名前の通り福徳円満な顔です。

「ちようど一と月ばかり前のことでございます。お上の御用だからと言って、子刻このつ（十二時）過ぎに表戸を小僧に開けさして入って来た者がございます。臆病窓から見た時は顔を出していたそうですが、中へ入ると頬冠ほおかむりをしておりまして。いきなり十手を出して

小僧に喰らわせると、奥へ案内させて、寝ていた私を足蹴にして起し、その日の売溜めと、それから少しばかりの払いの用意に取って置いた金を持って行かれました。いえ、金はほんの十両ばかりでございませうが、手代の惣吉そうきちが飛出して御近所の方を呼んで来ようとする、後ろから呼止めて、振り返ったところへ、今盗ったばかりの売溜めの中の、錢を一枚投げられて、左の眼を潰つぶされてしまいました。可哀相に、まだ源助町げんすけちようの眼医者に通っておりますが、もとどおり見えるようにはなりそうにございませう」

「それは氣の毒だ」

平次もこう言うより外はありません。そこへ番頭は怪我人の惣吉を伴つれて来て、左の眼を巻いた白布しろぎれを取って見せました。腫はれは引きましたが、眼の玉は痛々しく潰れて、物の役に立とうとも思われません。二十三四の惜しい男振りです。

「こんなひどい目に逢わされました。親分さん、どうぞ、仇を取ってやって下さいまし」
そう言う惣吉の顔に、皮肉な表情のあるのを、見のがすような平次ではなかったのです。
「その強盗が、私に似ていたそうだね」

「へエ——」

と惣吉。

「これこれ、失礼なことを申上げては——」

主人の徳七はあわてて止めましたが、

「背の恰好、反り身になる時の具合、お言葉の様子、そつくりと申したいほどでございませよ」

眼一つ潰された怨みのせいか、惣吉は齒に衣を着せません。

「その上、十手を持つて歩いて、投げ銭まで器用では、本人の俺が見ても疑いたくなるだろう。まあいい、そのうちに尻尾を掴んで、仇を取ってやる折もあろう」

平次はそんな事を言つて、そこそこに引揚げました。

愀鬱な四月空、桜は散りましたが、梅雨前の気圧が、妙に人間の心を灰色に沈ませます。

二

「親分、次は」

「車坂の質屋だ」

五軒目が桔梗屋喜兵衛、ここでは偽平次、一家残らず縛り上げて、有金百両余りと、少し浮気っぽいという評判はあつたが、下谷一番と言われた小町娘のお藤をさらって行つたのです。

「ツイ十日ほど前の晩でございました。寅刻（四時）近い頃、どこから入つたとも判らぬ男が、店中の者を一人ずつ縛り上げた上、百両ばかりの金を用箆筒ようだんすから出させ、娘に猿轡るくつわを嚙ませて、裏口から飛出してしまいました。あんまり手際が良いので、忍術使いか何かじやあるまいかと申しております」

主人の喜兵衛は四十男ですが、いかにもがっかりした様子で説明してくれます。

「お藤さんの行方は？」と平次。

「それつきり分りません。三輪みのわの万七親分は、店中の者を一人残らず縛つた手際は、捕縄を扱い馴れた者の仕業だ——とおっしゃいましたが」

「……………」

ここにも平次に対する濃厚な疑い、——さすがにはつきりは言いませんが、主人の眼には疑惑が満ちます。

「つかない事を訊くようだが、——お藤さんに親しい男でもなかったらうか」

「世間ではいろいろ噂があつたようですが、取立てて親しい男があつたとは存じません。もつとも、近いうちに、湯島の山崎屋専助へ嫁にやるはずで、祝言の日取まで決めておりました。金は惜しいと思いませんが、せめて娘だけでも無事に帰るようにな、お骨折を願います、親分さん」

聞きようによつてこれは、お前の手から娘を返せとも取れます。

「お藤さんが、その婿を嫌っているような様子はなかつたらうか」

「へエ——、あんまり好きではなかつたようでございます」

これ以上に訊く事ありません。三輪の万七が調べ上げて、店中の者を縛つたのは、捕縄を扱つたことのある者と言うなら、それも信用して差支えのないことでしょう。

「八、娘にはきつと男があつたと思う。お前の鼻で嗅ぎ出しちやくれまいか」

「ようがすとも親分、そんな事は朝飯前で」

八五郎は平次と別れて、どこともなく飛んで行きました。

それから二三軒当つて、神田へ帰つたのは夕方、さすがの平次もがっかりして、物静かにいたわつてくれる、若い女房のお静にも口を利こうともしません。

投げ銭、十手、捕縄のさばき、声から、身体の恰好まで、錢形の平次によく似たという強盜は、一と月の間に、江戸中を八ヶ所も荒しておりました。それがみんな浅草下谷したやに集中して、芝に一軒、小石川に一軒ありますが、悉く平次の縄張を除よけているのも不思議です。

その中で、怪我人が三人、誘拐かどわかしが一人、奪とられた金は五百両あまり、何しろ意地が悪くて、賢くて、残酷で、敏捷で、手の付けようのない曲者くせものです。

「ね、お前さん、どうかなすつて？」

お静は一本銅壺どうこに落しながら、平次の顔をそつと覗のぞきました。一緒になつてからもう一年、こんなに屈托した顔を一度も見せたことのない夫だったのです。

いい加減世帯馴れたはずのお静ですが、初々しさはいつまでもこぼれて、何か言われたら、そのまま、笑いも泣きもしそうな、明けっ放しな表情の可愛らしさは、物思いがなかつたら、引寄せたくなるでしょう。

「お上の御用には口を出さない方がいいよ」

「でも」

「この平次が強盜おしこみか強盜でないか、お前はよく知っているはずだ、安心していいがいい」

優しく言われると、ツイ涙ぐむお静だったのです。

三

「判りましたぜ、親分」

「八か？」

平次が顔を挙げたところへ、ガラツ八の八五郎は、獵犬のように飛込んで来ました。

「あれは大変な娘だ。噂の立った男だけでも三人や五人じゃありません」

「そうだろう」

「それが皆んな強盗ぐらいはやり兼ねない人間ばかりだから不思議じゃありませんか」

「何だと、八？」

「最初にお藤と噂のあつた下廻り役者の中山半七郎、こいつはちよいと好い男で、横顔と後ろ姿は銭形の親分そっくりだ」

「馬鹿野郎」

「それから、軽業の芸人で、両国の小屋に居る古川一座の甚三郎、こいつは曲毬きよくまりの

名人で、投げ銭ぐらいはやり兼ねねえ」

「……………」

「もう一人は、三輪の万七親分のところに居る、お神樂かぐらの清吉」

「えっ」

「これなら捕縄のさばきはお手のものだ」

「それだけか」

「神谷町の伊勢徳の手代——あの眼を潰された惣吉も、一年前まで浅草の出店に居て、お藤と変な評判が立ったそうですよ」

「フーム」

「とにかく、あの娘の情いろおとし夫は皆んな怪しいと思つて間違いはありませんよ、大変な娘があつたものさ」

「それで大方眼鼻が付いた。八、もう偽物なんかには負けないつもりだよ」

「親分、睨しっかりやつておくんささい」

ガラツ八は大はしやぎですが、平次はまだ深々と拱こまぬいた腕を解こうともしません。

「それにしても、不思議なことが二つ三つあるんだ」

と平次。

「どんな事で、親分」

「強盗の入る晩は、きつと俺がどこかへ行つた時だ、——言い訳の出来ないように仕組むのが一つさ」

「それから」

「俺の縄張うちへは足を踏み入れないのも不思議だ」

「親分が怖いんで、お膝元へは乗込めないでしょうよ」

「そんなはずはない」

「だがね、親分、あつしにも腑ふに落ちない事が一つあるんだが」

ガラツ八も高慢らしく腕こまぬを拱こまぬきます。

「何だ、言ってみろ。——あんまりお前の腑ふに落ちた物事なんてえのはあるまい」

平次は始めて莞爾にっこりとしました。

「親分と八五郎は、影と形、太夫たゆうと三味線、切つても切れない親分子分でしょう」

「それがどうした」

「銭形の親分の偽物があつて、八五郎の偽物が出て来ないのが不思議でならねえ」

「何だ、馬鹿馬鹿しい。そんな長い面の偽物なんか出来合にあるものか、ハツハツハツ」
平次はとうとう笑い出しました。が、気が付いてみると、そう言ったガラツ八は、お付合に笑いながらも、妙に涙ぐんでいたのです。こんな事でも言つて、この一と月あまり笑顔を見せなかった、親分の平次を笑わせるつもりだったのでしょうか。

「ハツ、ハツ、ハツ、ハツ」

全く、そう言ったガラツ八自身は、止めどもなく笑っているのです。

四

その晩、偽平次の強盗は、湯島の山崎屋に入りました。湯島は平次の縄張ですから、昨夜八五郎に「俺の縄張を荒さないのが不思議」と言ったことを思い出して、さすがの平次もギョツとした心持でした。

山崎屋の専助というのは、言うまでもなく桔梗屋のお藤が嫁に行くはずだった家で、商売というほどのことはありませんが、二三年前から店を持って、中どころの商人や、御家人安旗本などを相手に金を廻し、小体ながらなかなか裕福に暮らしておりました。

「これは銭形の親分さん、御苦勞様で——」

平次を迎えたのは、若主人の専助、まだほんの二十二三の男ですが、氣風も身体もしっか瞭りした桔梗屋が娘の婿にと望んだだけに、何となくたのも頼母し氣な青年でした。

「とんだ災難だったそうだね」

「有難うございます。まだ宵のうちで、私は留守でございました。お勝手から入って、下女のお滝を案内に、隠居所に休んでいる父親の専左衛門せんざえもんを脅かしたそうでございますが、父親は永の患いで、心持が本当でございません。泥棒は父親の部屋から手文庫だけを持出して、庭で錠前を打ち割って、中にあつた七八兩の金を持って逃げたそうでございます。

——いえ、金は大した事はございませんが、帰って行く時、庭の松に引つ掛つて、うっかりほおかむ頼冠とりが除れたそうで、お滝は泥棒の顔をよく見たと申します」

「えつ、それは真ほん当とうか」

平次よりも八五郎の方が驚喜しました。

「すると、泥棒の方でも吃驚びっくりして、いきなり下女の顔へ手文庫の中の金かねを叩き付けたそうで、可哀相に若い娘が額をやられております。私が帰って来なかったら、引返して下女の命を取る氣になつたかもわかりませんが、泥棒が裏木戸から逃出すと一緒に、私が外か

ら帰ったので、幸い何事もございませんでした」

「お前さんは、どこへ行きなすったんだ」

と平次。

「車坂の桔梗屋へ参りました。夕方までに帰るつもりでしたが、無理に引止められて、晩の御馳走になりましたので、家へ帰ったのは、戌刻いっつ（八時）少し前でございますか——」

専助の言うのは非常によく筋が通ります。

「お滝とやらに逢つてみたいが」

「へエ——」

専助に呼出された下女のお滝は、房州生れの十八、世間並みのよく肥ふとった娘でした。投げ銭で額を割られて、少し大袈裟おおげさな縷ほうたい帯はしておりますが、根が丈夫そうで、大した屈托もなく働いている様子です。

「お前は、泥棒の顔を見たそうだが、どんな人相をしていたえ」と平次。

「若い、好い男でございましたよ」

「俺に少しは似ていたか」

「声と顔立は似ているようですが、まるつきり違いますよ。泥棒は左の頬に大きな赤痣あかあざがありますよ」

「何？ 左の頬に、大きな赤痣、——よっほど大きいか」

「掌の半分ほどもあるでしょう。一度見たら、どんな人ごみの中でも判ります。火のように真っ赤な痣ですもの」

「フーム」

偽平次、姿も声も顔も似たという泥棒の、頬冠りで包んだ左の半面に、掌の半分ほどの大痣があるとは、何という事でしょう。

「親分、有難い、明りが立ったッ」

ガラツ八は思わず飛上がりました。真物ほんものの銭形平次の頬には、左にも右にも、鵜うの毛ほどの汚点しみもありません。

「大丈夫間違いはあるまいな」

と平次。

「お勝手から射す灯あかりでよく見えたんですもの、間違いなんかありません。それを見られたのが口惜くやしくて、こんな目に逢わせたんですもの。裏口へ人の跫あしおと音が聞えなかつたら、

私は殺されたかも判りませんよ」

お滝は思いの外しつか睨りした娘でした。

「お前はいつ頃からここへ奉公しているんだ」

と平次。

「半年になります」

お滝の思わぬ手柄を聞いて、平次は妙に沈んでしまいます。

「親分、いい塩あんばい梅じゃありませんか」

ガラツ八はまたそれが不足でならなかったのです。

五

離れの隠居部屋に居る父親の専左衛門は、六十を越した老人で、何を聞いてもうけこたえ応答の出来ないほど老もろく耄しておりました。それに、悪い病気で身体も動かさず、毛も抜け、顔も半分崩れて、見る影もありません。

この年寄りの浅ましい姿を見せるのは、せがれ倅の専助にはかなりの苦痛だったらしく、平次

と八五郎が母屋へ引揚げたときはホツとした様子で——それでも引返して、蒲団を直したり、用事を訊ねたり、何かと親切にしている様子でした。

若いに似合わず金儲けは上手で、町内でも評判の専助ですが、平次が見たところや、八五郎がききかじ聞齧ったところでは、見掛けに似合わぬとんだ孝行者だということでした。

「親分、いよいよ汚名がそがれましたね。泥棒の左の頬に、火のような赤痣があると聞いた時は、思わず声が出ましたぜ。嬉しさがこみ上げるてえのはあの事だね」

ガラツ八の言葉を空耳に聞いて、平次は、

「いよいよこの強盗おしこみは桔梗屋のお藤と引つかかりのある者に決った。お前が聞込んだ筋を一つ一つ手繰つてみよう」

「役者の中山半七郎は、小屋が休みでどぐろを巻いていますぜ」

三味線堀の裏長屋ながら、八五郎が案内したのは芸人の住居すまいらしく磨かれた家でした。

「御免よ、親方は居なさるか」

「あッ、銭形の親分さん、——どうぞ」

半七郎はアタフタと二人を迎え入れました。少し自堕落な風俗ですが、役者らしく白粉おしろ焦けいのした顔いや、スラリとした後ろ姿が、平次に似ないことはありません。

「私を知っていなさるかい」

「銭形の親分さんを知らない者はありません」

「お世辞ものだね、親方」

「親方とおっしゃるのは御勘弁を願います。私はまだ本当に馬の脚で——」

中山半七郎は頸筋くびすじを掻きました。平次の調子が少し皮肉に聞えたのでしよう。

「俺と親方が似ているんだってね、世間の人はそう言うが——」

「へエ——」

「もつとも、役者に似ていれば、俺は本望だが、親方の方じゃ迷惑だろう」

「とんでもない、親分さん」

半七郎はますます恐縮してしまいました。通な人達からは鰯このしろの腹と言われるピカピカの

一張羅いっちようら、それを寝押しして夜昼オツ通して着ているらしく、部屋の中の調度も、田舎芝居

の小道屋のようで、何となくケバケバしく見えます。

「お前さん、桔梗屋のお藤を知っているだろうね」

「へエ——」

「どんな掛り合いだえ」

「以前、御ひいきになりましたが、近頃は一向お目にかかりません」

「何か、固い約束でもした事はないだろうか」

「とんでもない、芝居者と客の間で、——」

「約束はしても当てにはならないというのだろうね」

と平次。

「恐れ入ります、素人衆はツイ夢中になりますんで、へエ、とんだ迷惑をいたします」

鼻の下の長い白粉おしろい焦やけのした男が、こんな事を言うのですから、本当にいい気なものです。

「で、今は掛り合いがないと言うんだね」

「もう三月もお目にかかりません、——近頃世間の評判では、強盗にさらわれたという話で、とんだ事でございます」

「その疑いが親方にも懸っているのだよ」

平次はズバリと言つて退のけました。

「ご、御冗談で、親分さん、私は素人衆の女なんかは、飽き飽きしております。そ、そんな馬鹿なことがあるわけはございません。第一この通りの狭い家で、お嬢さんをさらつた

ところで隠しておく場所もない有様で」

半七郎は蒼くなつてしまいました。こんな疑いを掛けられてはたまらぬと思つたのでしよう。急に恐ろしい達弁になつて、ベラベラと喋舌ります。

「お藤は、お前さんをどう思つていたんだ」

「それが、その、あんな気の知れないお嬢さんはありません。舞台姿を見てやいのやいの言つたくせに、半年も経たないうちに厭気がさしたようで、どんなに呼出しをかけても、二度とここへはいらつしやいません」

六

平次とガラツ八は、その足を両国に伸のして、古川一座の軽業手品を見物しておりました。お藤の關係した甚三郎というのは、曲きよくまり毬まりの名人で、綱渡り、玉乗り、なんでも一通りはいける、一座の花形です。

年の頃二十七八、青髯あおひげの跡の凄まじい、こんな社会によくある精悍せいかんな顔をした男で、いかにも、浮気なお藤に注目されそうな人間でした。

一とわたり芸を見て、楽屋へ入ると、

「銭形の親分さん、先刻さつきからいらつしやることは存じておりました。わざわざこんな小屋へ御運びで、有難う存じます」

甚三郎、なかなかのしっか靨り者らしい男です。

「早速聞きたいが、車坂の桔梗屋のお藤——」

「へエ」

甚三郎の顔色は動きました。

「あれを知ってるだろうな」

「存じております。家出をなすつたそうで」

「家出じゃない、さらわれたのだよ」

「……………」

「知っている事はみんな言つて貰すきたいが」

平次の言葉は穏やかですが、隙すきもなく切り込んで行く名剣士の切尖きつさきのような鋭さがあります。

「世間ではいろいろの事を申しますが、私とは身分違いで、別に御懇意を願つたわけじゃ

「ごいません。一年ばかり前から御ひいきにして下さって、楽屋へいろいろの物を下さいましたが、近頃はお神楽かぐらの親分さんと仲が良いとかいう評判で、ここへはお顔を見せちゃ下さいません。そんな事は小屋の者が皆んな知っております」

「そうか、——お前の方では、あのお嬢さんをどう思っているんだ」と平次。

「何と申したところで、大家のお嬢さんと軽業の小屋に居る私とは——」

甚三郎の眼は悲しそうでしたが、それは、境遇から来る一種の悲メラ、哀コリで、この男の心の底には、したたかな魂の宿っていることを平次は見逃すわけはありません。

間もなく平次はガラツ八と一緒に引揚げました。

「親分、あの甚三郎が怪しくはありませんか、喰えねえ男のようですが」とガラツ八。

「いや、あれは身分違いに腹を立てているんだ。あの男の曲穂の腕は大したものだが、人間も睨しっかりしているよ。中山半七郎とは大変な違いだ」

平次は相変らず深々と考え込んでおります。

「残るのはお神楽の清吉だ、行ってみましようか、親分」

昌平橋近くへ来ると、八五郎はこんな事を言います。

「三輪みのわの万七あにい兄哥の家へか」

「へエ」

「馬鹿野郎、清吉は下つ引だが、万七兄哥の右の腕だ。まさか俺が出かけて、調べるわけにも行くめえ」

全く平次の言う通りです。お藤と何かの噂があつたにしても、岡つ引仲間で、調べも訊きも出来るわけはなかつたのです。

「だって、親分、この上怪しいのは、清吉だけじゃありませんか」

「何をつまらねえ」

二人はいつの間にもやら平次の家へ帰つておりました。

七

偽平次の強盗おしこみには、左の頬に赤い痣あざがある——ということは、その日のうちに江戸中に知れ渡りました。

お蔭で平次の疑いは晴れましたが、その代り左の頬に痣のある男は、年寄りも若いのも、金持も貧乏人も、橋の袂に居る乞食までが、一と通り疑われたり、調べられたりしました。

「親分、赤い痣のある男が向柳原の煎餅屋に居ますぜ」

「馬鹿、あれは右の頬だ」

ガラツ八はこんな事を言つて叱られております。

「神田から日本橋へかけて、少し赤い痣を探しましょう、親分」

「馬鹿だな、そんなに赤い痣が好きなら、手前一人で勝手に捜すがいい」

「今日は馬鹿が流行るぜ、親分」

「馬鹿」

これでは手の付けようありません。

「俺は両国へ行つて来るよ、甚三郎の曲毬は暇ツつぶしには悪くないぜ。少し遅くなるかも知れないが、手前は、赤い痣でも捜して歩くがいい」

平次が出かけたのは申刻過ぎ。

その晩また大事件が起りました。三味線堀の中山半七郎が、風呂の帰りを路地の中で襲われ、自分の手拭で縊り殺された上、家の中は滅茶滅茶に荒されていたのです。

宵のうちのことで、手拭で頬冠ほおかむりをした男が、人待ち顔に物蔭に立っていたのを見た者もあり、半七郎と何やら言い争っている声を聞いた者もあります。

いろいろの噂は総合すると、それは、銭形平次そっくりの姿と、その声です。

曲者くせものは例の偽平次に紛れありません。死体の側には、もう一と筋乾いた手拭が落ちていました。町役人見廻り同心が駆け付けて、明るいところへ持って行ってみると、手拭は神田台所町の酒屋で配ったもので、頬冠ほかむりをして、ちょうど頬の当るあたりへ、赤い無む二膏にじこうをベツトリ塗った、掌の半分ほどの巾きんが付いていたのです。

これを少し温めて頬に貼ったとしたら、夜眼遠眼には、赤い痣と見えないはずはありません。

「これだッ」

町役人も、見廻り同心も、町内の下っ引も顔を見合せました。

意地の悪いことに、そこへ来合せたのは、三輪の万七とお神樂の清吉です。

「赤い痣が偽物だとすると、こいつは可笑おかしなことになるね、親分」

多少でも疑いを掛けられた清吉は好い心持そうです。

「待て待て、殺されたのは下廻りの役者だ。銭形の兄哥あにいとは縁がなさすぎるぜ」

三輪の万七はさすがに常識があります。

「半七郎はこんなだらしない人間だが、思いの外金を持っていましたよ。女から絞るところが名人で——」

清吉の言葉は、近所の衆に裏書されました。ベラベラのあわせの袷を着て、見る影もない調度の中に住んでいるくせに、半七郎は不思議に小金を溜めている様子だったのです。

「それじゃ手前が一番怪しい事になるぜ、清吉」

「冗、冗談でしょう、怪しいのはやはり銭形だ」

お神樂の清吉は大きい声でこう言いました。明日は江戸中に、強盗はやはり銭形という噂が一パイに拡がるでしょう。

八

「親分、三味線堀の馬の脚が殺されたんですとさ」

と八五郎。

「そうだろう」

平次は驚く色もありません。

「あれッ、知っているんですかえ」

「いや、そんな事だろうと思つたよ、——ところで、昨夜出がけに、お前へ頼んだが、暗くなつてからこの路地を出た者は誰と誰だい」

「誰も出ませんよ。隣の按摩あんまが出て行つたきりで——笛の音が聞えましたよ」

「何刻なんじきだ」

と平次。

「戌刻いっつ（八時）かな」

「歸つたのは」

「戌刻半（九時）でしたよ」

「路地の中から笛を吹いて出るのは可怪おかしいな、八」

「あつしは按摩は嫌いで」

ガラツ八は鼻の頭を撫でます。

「俺も呼んだことはない」

「たつた半刻（一時間）で歸つたのも変だね、時々そんな事があるようだが」

「八、それだよ、——お前^{めえ}済まないがああの按摩を呼んで来てくれ、親分が腰が痛むそうだから、ちよいと揉んで下さいって」

「腰が痛むんですか、親分は？」

「何でもいいよ、腰が気に入らなきやア臍^{へそ}が痛いとか何とか言え、——それから、按摩がこの家へ入ったら、その隙をねらって、あの家のお勝手から入るんだ、二階の物干しはちようど此家^{ここ}の庭の上だ、話が聞えるか聞えないか、耳を澄ましているがいい——」

「そんな事をして構いませんか、親分」

「いいよ、俺が引受けるから、——それからいい加減のところ、火事だ、火事だって吠^ど鳴るんだ」

「親分、そんな事が——」

「いいってことよ、人が集まったら俺があやまってやるから」

手順がすっかり決りました。

間もなくやつて来た按摩、一人者で薄眼が見えるようですが、恐ろしく感の悪い男で、あらゆる物に躓^{つまず}いて歩きます。

「こつちだよ、按摩さん」

「へエへエ、親分さん、御近所に住んでいながら、ろくに挨拶もいたしません、——今日
 はまた有難うございました。私は、自分で言うのも変ですが、まことに按摩が下手で、
 —もつともまだ修業中でございますが、お気に召すような事は出来ません、へエへエ」
 五十前後、にわか俄按摩らしく、なるほど念入りの下手です。

「お前さん、そんな不自由な眼で、よく一人で居なさるんだね」

「姪が時々手伝いに来てくれます。それに、冷飯に味噌なを嘗めて暮すような身分で、大した不自由もございません」

よもやま四方山話をしながら、それでも腰から足へと揉んでいると、

「火事だ、火事だッ」

ガラツ八の声は隣から筒抜けです。

「按摩さん、お前さんのところらしいよ」と平次。

「そ、それは大変ッ」

按摩は這い出しました。柱に鉢合せをしたり、土間に転げたり、自分の家まで行く騒ぎ
 というものはありません。

「按摩さん、火はもう消えたよ。お前さん火の用心が悪いから、七輪の側の渋団扇しぶうちわが燃え出したんだよ」

ガラツ八は外から入って来ました。

「へエ——、七輪の火なんかはいはずですが」と按摩。

「私が飛込んで消してやったよ」

「有難うございます」

按摩は面喰らって帰って行きました。

「親分、ここの話は按摩の家の物干しに居るとよく聞えますよ」

「シツ」

「それから、親分」

と声をひそめるガラツ八。

「解つたよ、按摩の家から、女が一人飛出したろう」

「よく御存じで」

「その鼠ねずみを追い出したかったんだ。それが出ないうちは証拠が揃わねえ」

平次は始めて晴れ晴れしい顔になりました。

九

中山半七郎殺しの疑いで、両国の軽業小屋から、三輪の万七が曲きよくまり毬まりの甚三郎を挙げたのは、その翌あくる日の昼頃でした。

と、同時に、車坂の桔梗屋からは、娘のお藤が無事に帰って来たという知らせが、三輪の万七と銭形の平次のところへありました。

「さア分らねえ」

八五郎は長い顎をしきりに撫で廻していると、

「八——、だいぶ前の事だが、花川戸の近江屋おうみやの娘が、轟とどろきの権三ごんざという香具師やしに誘拐かどわかされ、幽霊の見世物にされて殺されかけた事があつたが、覚えているだろうな」（「幽霊にされた女」参照）

平次は妙な事を言い出します。

「あの時捕まった一味のうち、轟の権三と人相見の観相院かんそういんが牢破りをして逃出した」

「……………」

「その観相院が、隣の按摩そっくりだとは思わないか」

「あッ、眼をつぶっていたから気が付かなかつた。なるほどそう言えば、あの野郎だ、しよつ引いて来ましようか」

「待て待て、観相院は雑魚だ、それよりも大物を縛らせてやる」

平次がガラツ八を伴れて車坂の桔梗屋へ行ったのはもう夕方。

「親分さん、娘は戻つて参りましたが、何を聞いても口を噤んで一とも言も申しません」

父親の喜兵衛は狐につままれたような顔をしております。

「ちよいと逢つてみたいが——」

平次は奥へ通りました。

お藤は大したやつれもなく、母親に何かと口説かれておりますが、美しい顔を俯向けて田螺のごとく唇を閉じている様子です。

少し浮気っぽいにしても、全く抜群の美しさ、下谷小町と言われたのも決して嘘ではありません。

「お藤さん、——帰つて来なすつたそうだね、まあ、いい塩梅だ、今度は文句なしに、

湯島の山崎屋へ嫁に行きなさるだろう？」

「……………」

お藤はそう言われると、サツと顔色を変えて、激しく頭を振りました。

「八、帰ろうか」

それつきり外に出た平次。

「帰るんですか、親分」

物足りない八五郎の耳へ、

「八、今晩は命がけだよ」

そつと囁くのでした。

そこから湯島まで一と走り、山崎屋の裏口へ八を立たせた平次は、

「ここで見張っているがいい、誰でも構わないから飛出したら組み伏せろ」

そう言いおわると平次は、静かに、落着き払って表口から入って行きました。

「今晩は」

「おや、銭形の親分さん」

帳場へ迎えた専助の顔には、何の蟠りわだかまもありません。

「お藤は無事に帰りましたよ」

「へエ——、それはいい塩梅で」

「そして、何もかも打ち明けたぜ」

「えッ」

「御用ッ」

平次が飛びかかるのと、専助が算盤そろばんを取って身構えるのと一緒でした。

恐ろしい格闘が始まりました。二人の手から互に投げ出される銭、銭、銭——。

平次も幾つか顔へ叩き付けられましたが、手練の違いで、専助はどうとう力尽きて平次の膝の下に組伏せられます。

その時、裏口へよぼよぼと逃出した物の影のような怪しい男。

「御用ッ」

ガラッ八はやり過してむずと組付きました。

*

「親分、解らねえことばかりだ、絵解きをしておくんさい」

山崎屋の専助、専左衛門親子を番所に引渡した帰り、ガラツ八は平次の浮かぬ顔を覗きました。

「父親の専左衛門は、轟の権三の成れの果さ。俺に捕まったのが破滅で、一度は獄門台に上ろうとしたのを怨みに思い、せがれ 倅の専助を仕込んで、あんな芝居を打ったんだよ」

「専助は親分に少しも似ないが」

「それが術だ、ふだん 平常少しも似ない専助が、みなり 身扮から声まで俺に似るのは、修業のせいもあるが、専助は親父の小屋で、物真似をして客を呼んでいたことがあるんだよ」

「なあ——る」

「投げ銭もあれだけ器用になるには、骨を折って稽古した事だろう。お藤などにかかり合いが出来なきやア、いつまでも銭形の平次が強盗おしこみ 盗すると世間に思わせたかも知れない。危ない事だ。もう少しで俺も破滅だったよ」

「……………」

「お藤に迷って、金の力で婿になる話を進めたのはよかったが、どたん場になってお藤が頭をふるの、お藤と噂のあった人間を怨んだ。惣吉はそれで左眼をやられたのさ」

「お藤をさらったわけは」

「あれは変った娘だ。役者の舞台姿に迷ったり、曲穂の軽業師や、岡っ引の清吉に打ち込むといった気性だから、堅気の商人あきんどが嫌いだったのさ。専助にさらわれて、妙に専助が頼もしくなったんだね、——隣の按摩のところかくに匿されて十日もじっとしていたのは、専助が怖いせいもあったが、一つは、専助を見直す心持になったんだろう」

「それじゃ、半七郎を殺したのは？」

「やはり専助さ。自分へ心が傾きながらも、お藤はまだ半七郎に未練があると思つたんだ。一と思いに殺したが、そうまでするとお藤も怖気おそけを振つた。お藤は物好きな娘だが、何と言つても若くてお転婆てんぱなだけだ、——火事ツと聞いて、夢中で飛出して家へ帰つたが、さすがに専助の脅かしが利いているから怖くて、親父にも打明ける気にはなれなかつた——どうだ、こんな事じゃないか」

恐ろしい明察、そう聞くと何の疑いも残りません。

「赤い痣あざは？」

「専助の悪く賢いところだ、『俺の縄張は荒さない』と言つたのを按摩から聞くと、業ごう腹はらでたまらないから、あんな芝居を打つたが、俺に疑いをかけるようなことをするとか

えって危ないと思ひ、赤い膏藥こうやくなどを使つてこの平次の疑いを一度解き、後で半七郎を殺した時、わざと膏藥を落して、痣が偽物だと判らせたのは、この平次にかかる疑いを二重にも三重にもする術てだつたんだよ」

「悪い奴だね、親分」

「悪い奴だが、——こんなに怨まれてみると、岡つ引も罪が深いな」

「按摩は？」

「今頃は逃げ出したろう、放つておけ、あれはただの目付けだ。運が悪きやア、万七兄哥か清吉にでも捕まるだろう」

平次は本当に悲しそうでした。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（五）金の鯉」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第四卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1935（昭和10）年4月号

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2016年9月9日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

赤い痣

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>